

ジヨルダンノブルノ著

原因原理及び一者ニツキマシ

吉岡俊輔訳

オ  
ー  
の  
対  
話

登  
場  
人  
物

エ  
リ  
ト  
ロ  
ピ  
オ

(諷  
註)

ブルノの信奉者)

フ  
イ  
ロ  
テ  
ー  
オ

(諷  
註)

ブルノ自身)

ア  
ル  
メ  
ッ  
ソ

(諷  
註)

英国人・ブルノの友)

エリトロピオ 長い間、暗い塔の牢に閉じ  
こめられて、太陽の光から遠ざけられていた  
囚人達のぶらに、今まで因襲的哲学の中で  
育って来た多くの人々は、君の輝やかしい思  
想の太陽の光に、すぐには耐えられない出来  
ず、驚き、恐れ、困惑することになり。  
フイロテリオ それは太陽の答ではない。  
その光に耐えられない目の答である。太陽が美  
しく、輝やかしければ、輝やかしいほど、ます  
ます鼻と目の目には、うとましく、不愉快に

映するのた。

エリトロピオ 君は彼等を暗い深淵の底か

ら引上げ、藍色の天穹に様々な形に

さりばめられた星の眩々として静寂晴朗な

眺望の下に導き出さるるとしているか、フイロ

テーオ君、それは、かゝてあまり企てられた

事のない非常に困難な仕事だと思ふよ。それ

に、よしんば君が彼等に救いの手をさしのべ

たとしても、温和なる大地がほみ出し、その

舟なる大なるふとこぞで養つていゝ動物と

もか様々であるのと同じく、いろいろ種々の

恩恵の報い、期待出来ない。動物の

種属が様々であるのと、同じように、実に多種

多様な人間がいれば、多くの人は、

盲目のもぐらも、そのように、自由なるもの

やかな大気には、ふれるや否や、あわてふため

て、再び土の中にとってかえし、故郷のあの

暗い穴ぐらに、深し求めると、とて。或いは

夜鳥のように、東の空に、深紅色の曙光が輝

始めると、否や、そのうす暗き垣を、さして飛

去るニとたさう。太陽の光

ト入の永遠の獄舎につほ

は全て、日の光が見え出す

の恐ろしい宇宙に叫ばれて

大急ぎでそのすみかへ逃れ

陽の眼差の下に育つにほき

が終りに近づくのをみると

し、憧れ望んだきらめく光

え入れ、全身全霊を以って

に感謝する。テイタイン

かき追放されプル

かかれているほき物

や否やアレクト

羽根を振げて

帰るのだ。だが太

物は、厭わしき夜

天の恵みと称讚

と飲呼の声でむか

現われ出た太陽

金色の東の空から



燃えさかる馬を駆り立て、いめいめと一夜  
の沈黙を打ち破る時、人間達は語り始め、従  
順な羊どもや乱暴な牛飼達に監視されている  
牛どもは鳴き声を立てはじめる。シールノ  
スの馬どもは、神々への牛笛すけに驚かな巨  
人達を恐怖に落とす。こんでやろうといわんば  
かりに叫び声を張り上げ始める。豚は汚れた  
いぬぐすの中ゴゴロゴロいながらウブウイ  
い、虎や熊や獅子や狼やわろかしこい狐は穴  
の中から首を突き出してうなり声を立てなが

3 狩猟場を偵察し始める。空や大木の枝では  
 雄鶏や鷲や孔雀や鶴、鳩、山鳩、鶯、鴉、鵲、  
 郭公、蝉等が騒々しく囀りだす。又、池  
 ではゆりうりつろろな蛙や白鳥、色あざやかな  
 鴨、敏捷な鷺鳥やその他の水鳥ともが耳を聳  
 せんばかりに鳴き始める。その騒がしさととき  
 たら、この暖かい太陽の光が大気を貫ぬく時  
 に、自分が歓迎されていようの感と感じる外に  
 なお、煩わしさをも感ずるにちがいないほど  
 だ。その鳥どもの精神 *spirits* (この精神が胸の



底から声を出るのであるか）は実に様々であ

り、従って彼等は実に様々なる声でやかまし

く鳴き立てるのである。

フイロテイオ 動物はやかましく鳴くのか

普通だ。むしろそれかより自然なのであり必

要でさえあるのだ。体の構造も、好みも、食

物も人間とは異なっていて、いるのだから、動物は

人間のようには声にアクセントを付けたり抑揚

を付けたりして、声を美しくやわらげると

か出来ないのだ。

アルナツソ  
失礼だけれども、  
どうか僕にも

言わせたくれ給え。  
僕が言いたいは、  
エリ

トロピオ君の言  
って、  
太陽の光に

いてじゃなく、  
我々を喜ばせ  
てくれるこ

ろか、かえって  
思慮ある人々の  
心を傷つける

若干の事情につ  
いて存じた。と  
いうわけは、

もし、この君達  
の談話を、  
フィロテオ君、

君が再び喜劇に  
なり、  
悲劇になり、  
或いは  
悲

歌や対話篇等に  
まよめあげて  
公表するとす  
れ

ば、  
前と同じ  
君は非難を浴び  
て、  
蟄居を  
強

制され

息を奪

フイロ

アルナ

に存った

、  
神祕家

にも語り

づけられ

ソスの放

てられた

僕がじから君に望んでゐる平安と休

いとされてしまふに、  
或いはアポロに酔ひ痴れおた

テリオオ  
どうか続けなくれ給え。

ツツ  
僕は予言者のように、有頂天

予言者のように語りたくはない。又

バ、あの、  
バラームの雌驢馬のよう

たくはない。更に、  
バツカスに活気

ている人のように、  
或いはパルナツ

掬なムーサ達の吐息に酔ひ痴れおた

人のように、  
或いはアポロに孕